

令和元年6月26日現在

機関番号：33917

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07171

研究課題名（和文）日本近代文学における異文化圏への越境に関する研究 永井荷風の文学活動を中心に

研究課題名（英文）Study of modern Japanese literature's crossover into foreign cultural spheres:  
Based on the literary activities of Nagai Kafu

研究代表者

岸川 俊太郎（KISHIKAWA, Shuntaro）

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：90802075

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、明治期から昭和期にかけて活動した永井荷風（1879-1959）の文学的営みを究明することを通して、日本近代文学における異文化交差の諸問題を検討することである。荷風に関する一次資料の収集、調査、分析を中心とする基盤的研究を進めながら、荷風の外国文学受容と創作活動との関わりについて考察を深めることによって、日本近代文学における異文化圏への越境という問題について新たな知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治期から昭和期にかけて活動した永井荷風の創作営為と外国文学受容との関わりを中心に考察を行った本研究は、荷風文学の新たな一面を照らし出すものと考えられる。また、異文化交差という視座から永井荷風の文学的営みを検討した本研究の成果は、個別の作家研究にとどまらず、日本近代文学における異文化圏への越境という問題や国際化の進む現代における日本文学の意義を捉え直す上でも重要な手掛かりを与えるものであると考える。

研究成果の概要（英文）： This research study considers the various issues surrounding the crossover of modern Japanese literature into foreign cultures through an investigation into the literary works of Nagai Kafu (1879-1959), who was active between the Meiji and Showa eras. While pursuing a fundamental study that is based on the accumulation, inspection, and analysis of primary source materials regarding Kafu, new insights have been gained regarding the issue of the crossover of modern Japanese literature into foreign cultural spheres by the deepening of the study of the connection between Kafu's reception of foreign cultures and his creative activities.

研究分野：日本文学

キーワード：日本近代文学 永井荷風

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

## 1. 研究開始当初の背景

明治期から昭和期にかけて活動した永井荷風（1879-1959）は、小説家としてデビューした青年期に、約5年近くアメリカ・フランスに滞在した（1903-1908）。荷風はその体験をもとに『あめりか物語』（博文館、1908年）、『ふらんす物語』（博文館、1909年、発売禁止）など、日本近代文学の従来の表現を更新する重要な作品を生み出した。日本近代文学における異文化交差の問題を検討する上で、荷風の文学的営みについての研究は重要な意味をもつといえる。

荷風の外遊体験については、武田勝彦『荷風の青春』（三笠書房、1973年）や平岩昭三『西遊日誌抄』の世界—永井荷風洋行時代の研究』（六興出版、1983年）などによって研究の先鞭がつけられ、その後、滞米時代の荷風の足跡に新たな光を当てた末延芳晴『永井荷風の見たあめりか』（中央公論社、1997年）、荷風の滞仏時代に焦点を絞った加太宏邦『荷風のリヨン 『ふらんす物語』を歩く』（白水社、2005年）などによって研究が進められた。なかでも、外遊時代の作品を軸に荷風の文学営為を意味付け直した南明日香『永井荷風のニューヨーク・パリ・東京—造景の言葉』（翰林書房、2007年）は特筆される研究成果である。

また、荷風の西洋体験と創作営為の関係を考察する上で重要なテーマとなるのが荷風のフランス文学受容である。荷風は西洋文学から多大な影響を受けたが、なかでもフランス文学はその中心的な位置を占める。伊狩章「永井荷風とモーパッサン—その比較文学的考察—」（『国語と国文学』第31巻第6号、1954年6月）、中村光夫『作家の青春—荷風と漱石』（創文社、1952年）の一連の考察は、荷風文学における西洋体験とフランス文学受容の重要性を早くに指摘した。その後も、赤瀬雅子『永井荷風とフランス文学』（荒竹出版、1976年）、同『永井荷風—比較文学的研究』（荒竹出版、1986年）、同『永井荷風とフランス文化—放浪の風土記』（荒竹出版、1998年）、南明日香『永井荷風のニューヨーク・パリ・東京—造景の言葉』（前掲）、林信藏『永井荷風 ゴライズムの射程』（春風社、2009年）など、荷風の外遊経験を中心に、荷風とフランス文学の関係について考察する研究が発表されている。

## 2. 研究の目的

こうした研究状況を踏まえ、本研究は、荷風の文学活動の究明を通して、近代日本の作家が直面した異文化交差をめぐる諸問題を検討することを目的とする。荷風は帰国後もフランス文学をはじめとする外国文学を弛みなく吸収し続け、異文化圏との接触によって培った豊かな文学経験を自らの創作活動に活かした。戦後の荷風については、「精神の脱落」（石川淳「敗荷落日」『新潮』1959年7月）と評されるように、これまで否定的な評価がなされてきたが、しかし、荷風は晩年まで外国文学を摂取し、それを作品創作に活かしていた。荷風文学における異文化交差の問題はまだまだ研究の余地が残されているといえる。こうした観点から、本研究では、異文化交差という視座から永井荷風の外国文学受容と創作活動との関わりに焦点を当てる。そして、荷風の文学的営みの解明を通して、荷風の文学表現の特質を明らかにするとともに、日本近代文学における異文化交差の諸問題を検討する。

## 3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するためには、荷風の文学的背景を丹念に追究していくことが必要である。荷風は創作営為の実態を含め、文学活動に関わる広範な情報を書簡や日記に記している。こうした点を踏まえ、新資料（自筆書簡等）を含めた荷風の一次資料や同時代の文献資料の収集、調査に努める。具体的には、荷風の関係資料を所蔵する文学館、図書館、研究施設等での研究調査を行うとともに、研究課題に関する文献資料の収集、分析を進める。

また、荷風の文学的背景を把握する重要な資料として、荷風の日記『断腸亭日乗』に注目する。『断腸亭日乗』は1917年から荷風の死まで約42年間にわたって書き続けられた。『断腸亭日乗』には、荷風が親しんだ外国文学に関する記述が数多く残されている。日記に記された外国文学に関する記述を調査、解明することを通して、荷風の外国文学受容の実態を把握する。その上で、それが荷風の作品創作とどのように関わっていたかを明らかにする。

一連の研究成果に基づきながら、荷風の創作活動と異文化受容との関わりについて追究することで、日本近代文学における異文化圏への越境の問題に新たな光を当てること、本研究課題を達成したい。

## 4. 研究成果

本研究課題は、明治期から昭和期にかけて活躍した永井荷風の文学活動の究明を通して、近代日本の作家が直面した異文化交差をめぐる問題を検討することにある。

本研究課題を達成するために、初年度は、永井荷風に関する一次資料（全集未収録書簡等）の収集、調査、分析に基づく基礎的研究を行った。その一つとして、市川市文学ミュージアム（於・千葉県市川市）に寄贈された永井荷風の未発表書簡（大賀渡宛）の翻刻作業がある。同書簡は、1945年3月に東京を襲ったアメリカ軍の大規模空襲によって麻布の自宅・偏奇館を失い、流浪の生活を余儀なくされた戦争末期の荷風の心境を把握する上で、欠かすことのできない資料であるといえる。同書簡の翻刻は、2017年11月3日から2018年2月18日まで開催された「永井荷風展—荷風の見つめた女性たち—」（市川市文学ミュージアム主催）の図録に掲載された（『永井荷風展—荷風の見つめた女性たち—』、川本三郎監修、市川市文学ミュージアム編集・発行、2017年、68頁）。

また、同展覧会に展示された谷崎潤一郎の全集未収録書簡（永井荷風宛）についても翻刻作業に当たった。文壇の潮流から距離を取りつつ、自らの創作活動を続けた荷風にとって、終生続いた谷崎との交流は重要な文学的意味をもつ。同書簡は戦争末期の荷風と谷崎の交流をうかがい知る上で貴重な証言をなすものといえる。上記の研究調査を通して、戦争末期の荷風及び谷崎の動静について新たな知見を得ることができた。この翻刻についてはその後、徳本善彦氏の資料紹介にて触れられている（「資料紹介 永井荷風宛 谷崎潤一郎書簡」、『語文』第163輯、2019年3月）。以上、一連の資料調査を通して、初年度は次年度の研究活動につながる基盤的研究を進めることができたと考える。

初年度に引き続き、二年目も荷風の外国文学受容の実態を把握するために、荷風及び荷風と交友関係のあった文学者の諸資料を所蔵する学術施設にて研究調査を行った。あわせて荷風を中心とする近代文学関係資料の更なる収集にも努めた。さらに、『断腸亭日乗』に記された外国文学に関する記述を整理し、具体的な名前が言及されている文学作品について資料調査を行った。その上で、それが実際の荷風の創作活動とどのように関わっているかを検討した。

具体的には、荷風が戦後に発表した短篇小説「噂ばなし」（『勲章』、扶桑書房、1947年）を考察した。「噂ばなし」は、語り手の「わたくし」が「或町」にいた頃、「戦死した兄の妻を、弟が娶っていたところへ、突然兄がかえって来たという話」を聞くという内容である。同作は1946年10月に書き上げられたが、その前年の『断腸亭日乗』に「亡国見聞録」と題して荷風が記した内容から、荷風が小説のもととなる話を実際に耳にしていたことがわかる。さらに、その当時の荷風の書簡を調査し、荷風がこの話を作品化するに当たり、知人の英文学者、沢田卓爾宛書簡の中で次のように記していることが判明した。「実は熱海にてきき候はなし戦死したと思はれし出征者が突然生還せしところその女房は自分の弟と結婚してみたと云ふ話をきき之を批評的にかいて見たいと存じモンパッサンの Le Retour と云ふ漁夫のはなしを例に取り候故もう一つ英文の例をも引用致度中学時代によみ候テニソンの詩を思出し候得共はつきりわからず突然御示教相願候処懇切なる御返書に接し感謝仕候」（1946年11月1日）。

ここには、荷風が実際に熱海で聞いた話を題材に作品を創作するため、同様の話をもつ外国文学の作品を取り入れようとしていたことが示されている。このような荷風の作品創造の熱意は「噂ばなし」の冒頭に端的に表現されている。「戦死したと思われていた出征者が停戦の後生きて還って来た話は、珍しくないほど随分あるらしい。中には既に再縁してしまったその妻が、先夫の生還したのに会って困っている話さえ語りつたえられている。/そういう話を聞いた時、わたくしは直にモーパッサンの「還る人」Le Retour と題せられた短篇小説を思起した。テニソンが長篇の詩イノック、アーデンもまた同じような題材を取っていたように記憶している。しかしそれ等はいずれも行衛不明になっていた漁夫が幾星霜を経た後郷里へ還って来た話で、戦争の事ではない」。

以上の点を確認した上で、冒頭に引用された「イノック・アーデン」と「還る人」(Le Retour)を検討し、「噂ばなし」に込められた荷風の意識を明らかにした。「イノック・アーデン」は、イギリスの詩人テニソンが1864年に発表した長篇詩で、その内容は次のようなものである（入江直祐訳、岩波文庫、1933年）。幼馴染のアニイと結婚した船乗りのイノック・アーデンは航海の途上で消息を断つ。残されたアニイは長年援助をしてくれた幼馴染のフィリップと新しい家族を築く。そこにイノックが故郷に戻ってくる。彼はアニイとフィリップが再婚したこと、アニイと自分の子どもが幸せな生活を送っていることを知る。イノックは彼女の新しい生活を邪魔しないよう、港の酒場の女主人にだけ自分の存在を明かし、孤独な死を迎えるのだった。

モーパッサン「帰郷」(Le retour)は、漁師の夫が漁に出たまま行方不明になった後、残された妻が別の男性と再婚したところに、元夫が訪ねてくるという話である（青柳瑞穂訳、『モーパッサン全集2』春陽堂、1965年）。妻は十年間、夫の帰りを待ちながら二人の子どもを育てたが、やがてその土地の漁師レヴェスクという男と再婚し、新たな家族を築いていた。現在の夫レヴェスクが元夫マルタンと決着をつけるために、男二人だけで近くのカフェで話し合いの場をもつところで小説は終わる。

「イノック・アーデン」はイノックの悲劇で結末を迎え、「帰郷」は、妻の所属が現在の夫と元夫との男同士による話し合いに委ねられるところで終わる。

しかし、荷風は以上のような両作品の内容とは異なる結末を「噂ばなし」に用意した。「噂ばなし」の女性は兄と弟のいずれとも婚姻関係を維持することを選ばず、二人の元から離れる。彼女は兄弟の家から逃げ出したことで、自分が初めて「家族的生活の道具になること」を意識する。彼女は東京に出て一人で生きていく道を選ぶ。「噂ばなし」は女性を所有物のようにみなす男性的な家族制度そのものを否定するのである。荷風は作中に次のような一節を書き加えている。「彼女はいつまでも同じ女ではなかった。生活の意識は死者の生還によって呼び覚まされた。むかしの儘なる家族制度には盲従していることができなくなった」。ここから浮かび上がるのは、新たな時代に自らの「生」を選び取ろうとする一人の女性の姿である。

以上のように、日本近代文学における異文化交差という視座から、戦後の作品「噂ばなし」について、新たな作品世界像を示すことができた。それは、戦後の荷風文学を再評価するための一助になると考えられる。

上記の考察は、「解説」(『問はずがたり・吾妻橋 他十六篇』、岩波書店、2019年刊行予定)の一部として収められる予定である。

一連の研究活動をもとに、荷風の外国文学受容と創作活動との関わりについて考察を深めることで、日本近代文学における異文化圏への越境の問題について新たな知見を得ることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔図書〕(計 1 件)

- ① 岸川俊太郎、「解説」、『問はずがたり・吾妻橋 他十六篇』、岩波書店、2019 年 (刊行予定)

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：